

差別意識を煽る疑似科学

四本 裕子

男脳・女脳という言葉がある。男性は脳が～だから、論理的な仕事に向いていて、女性は脳が～だから、感情豊かで家事に向いている、ということを読くと本もある。脳が違うから得意なことが違うのだという男脳・女脳の言説は疑似科学である。

脳の性差は存在しないわけではないが、その差は多次的である。特定の脳部位や活動量の大小ではなく、100以上の次元のパターンで定義されるような差である。そして、その差は決して大きくなく、個人の特性に一般化できるものではない。疑似科学の男脳・女脳言説が取り上げるような脳の男女差は存在しない。

行動や能力を測定すると、統計的に有意な性差が観察されることは多い(されないことも多い)。例えば、空間認知能力は女性よりも男性のほうが成績がよいという報告がある。男脳・女脳の疑似科学は、このような能力差は生まれながらの脳の違いに起因すると説くが、これも誤っている。脳は成長や加齢や訓練や経験で柔軟に変化する。数日から数週間の経験でさえ、脳の働きや形を変える。脳は社会における教育や経験の影響を受けて変化し、それに伴って人の行動や能力も変化する。実際に、空間認知能力の男女差はその国のジェンダーギャップ指数と相関するという研究もある。

ジェンダーギャップ指数121位の日本社会には、ジェンダーステレオタイプが蔓延している。男脳・女脳の疑似科学に基づいて性的役割分担を推進すると、格差はさらに広がり差別が生まれる。残念なことに、「脳の違いを理解してよりよい男女共同参画を目指しましょう」と、男脳・女脳を掲げた講演会を自治体が主催してしまった例もある。疑似科学に基づいて男女の格差を広げるような言説は、ニューロセクシズムとも呼ばれる。より多くの人がこの言葉の意味を理解し、その有害性を認識することが、格差や差別のさらなる拡大を食い止めることにつながるのではないかと思う。



PROFILE

よつもとゆうこ：東京大学大学院総合文化研究科准教授。Ph.D.(Psychology)。東京大学卒業。東京大学大学院人文社会系研究科で修士号取得。米国ブランダイス大学大学院で博士号を取得。ボストン大学およびハーバード大学医学部付属マサチューセッツ総合病院リサーチフェロー、慶應義塾大学特任准教授を経て2012年より現職。2019年日本学術振興会賞受賞。専門は認知神経科学。